

時數は二百八十五日の間に實のりする者なり、胎内へやどり込むのも刻四季よりやどり生れ出るも刻四季で生れでるなり、四季數二百七千三百六十。四季は、しきしよう云二萬は月日で體の出来る事七千とは天神七代の神せんとは元の臺の神を云ふ三百は三で産れる理なり、六十は六だいの神のかりもの、理。

刻數六千八百四十刻は六千は六だいの神が元で出来る理八百は八柱の道具の理、四十は四季でやどりて生れる理。

時の數三千四百二十時は三千とは、水と火と風が先と成て四百は四季から花が開き二十は二柱のまことで身の十用出来る理。

日數二百八十五日は二百は月日二神でいきをして八柱の道具しこうで身の内働き五たいと五はいごのたひいごなる理なり。

人間は四季上でやごまり四季理で生れるなり、此四季なければ生れる事出来んゆへに差汐の時に多く生れ又引汐の時に生れるなり、此差汐と引汐の間は知死期時とゆうて此四季に生れた子は命短かし又命あれば運わるし其理は、やどり込にも知死期時にやどりた所になり。

男女交合を色事と云ふのは

身の内五色のはい、青い、白い、赤い、黒い、黄いの五つを五しきとゆうは此心を合してする故いろ事とゆう、又世界も四季とゆうて、春九十日夏九十日秋九十日冬九十日四九三百六十日なり、此内に土用と云ふて、一季に十八日づゝあり是を四季合して七十二日と成三百六十日より七十二日となる、此四季と土用と五つにわりて五色とゆう、此理も四季上とゆうなり。

世界中子のやごるも生れるも同じ事なれどもきりよよきとあしきとあり又福德のあるごなきは前生の因縁此世に、はるてくるなり、又世で心の定め方身の行ひ方で理が分る、なんば精神の因縁あしくとも心月日に叶ふたら前世の因縁も切てめづらし守護下さるなり、

乳の理

一九〇

男親を父とゆひ母親をはとて居れども母の體より乳が出る、なせちとてゆうなれば父は天なり、天のやしない地をこやし萬物を育てる理なり、人間の母も夫の養を重じて身をこやし其身を肥した味がち、と成て出るなり乳の色は白色なれども元は、皆青いも赤いもいろく食た者が白い乳と成て、又味もすいもにがいも皆あまい乳と成て是は元よりかんろうの露で育た食物ゆへ白い甘い乳と成るは元の甘露と成て子を養ふなり、是れ天なり父なり此理で父とゆう人間はいつ迄も天の父に、稂を受て地の母のひざで育つなり依て世界中の人はひとなめの者を喰て育なり。

月様は萬物の元

皆世界中の物はなあり、なは國常立之命此神が元で出来たるそれくできたる萬物で有ゆ

へ何品でも名があるなり、名の違ふだけは品も違ふ丈は色も違ふなり。白いても、おしろいごうふは同じ白でも違ある、又木の葉の青いと草の青いとは違なり、名も違へば色も違ふ、色が違へば品も違ふ皆百色百品違へども其の元は名の一つにとどまる水の元は身のづうと云う火の元は水がらでけた草木なり、風の元は水氣と火氣の二つなり。

世界地震ゆる理

此地球に湯口四十八所あり此湯口一ヶ所止れば地ふるい動くなり、人間身の内も四十八ヶ所の脈すじ一ヶ所でも止れば身上ふるいうごくなり、身のふるいとは世界地震とは同じ事なり。

雷の理

水氣強き所へぬくみ急に登り水氣でつゝまれたる火勢發する故天なるなり、是は天のくもりなり人間心のくもりあれば腹のなるは此の理なり。

こゑるやせるごゆうは

こゑは月日のいき天地の事、あじの心、こゑるはようきなり、こゝろがこゑたらすいしんがこゑる、すいしんがこへたら身もこゑる。

やせるごゆうはやは月様の事、心の事、心にくろをしたら神の心のいすむなり。

小成神の心をせめるでやせるごゆうなんば味のよきものでも心やせたらあじもない、あじをしらねばすいしんがやせる、すいしんがやせるで身もやせる。

よめいりのしき

嫁入の時には下に赤き物を着て上に白衣を着るは、月日の理、白衣は何色にても染るなり其先方の家風に染ると云う事なり。

又頭にさす竿は一天の理、我生涯に夫一人より他に身をくるわさんとゆう理なり鼈甲の櫛は月日の形鼈甲は龜の甲なり龜は國狹土之命皮つなぎの理なり女常にあいそより世界つ

なぎの道具なるゆへ又其家の世績を育て先祖の名をかゞやかす爲の嫁なり此理で鼈甲の櫛

をさす又日々心の結ばれをときあげて内々睦しいの元ゆいをかける道具なり。

三世のかために盃を三三九ごうするは夫婦三から生れ六九に家を始める理と月日の如く

ようき、ように心いさんで暮す事を九ごうごゆうなり。

萬歳干以相の緒を奉ると云は萬年も變らん儀を以て親孝信夫 貞女兄 弟仲克く身上を敬

ひ身下を憐むことをゆうなり。

松竹梅のようは、松は末代の理松の色のかはらんみさを、ゆうなり。二葉はかれおちるとも共にはなれぬ理なり、竹は節數あれども元から末までくるいなし千代も八千代も心かわらん事を心の丈とゆう梅は五りんの花に良き香を含み實を結び其實の味は千萬年かはらんものなれば右の三種を敬ひこめる者なり。

草木のいきの事

木も草も生れあるものは、皆いきている、其譯は木の皮に人間のはだと同じ木あなあり。此あなより温みを入れて水氣をだかす、だいた水氣は其穴より吹出す、是で草木のせいじんするものなり。
草のさくも其物の性質に依て色々五色の色含み夫れ々花が咲花も水氣とぬくみなり。
實を結ぶも水氣と温みの二つを含み空氣にも水氣と温み有故なり。
實は風で實の依て是をなり物と云なりなは國常立之命此世界をくるりととりまいて守護

する故理とゆう理は九九理なり、此の世界を九で始めてしめて入る所を九九理とゆう。
此神の守護を「なり」とゆう萬事何の事なり其事なり、此事なり、とゆう、なり、は神の守護をゆう人間風俗をなり、とゆうも何事もなりきたるとゆうも同じ事なり。

よあいつよいの理

よはいとはよい月様此月の心よりあいをするゆへ心のやさしき人の下に從ふ者をよあいとゆうなり。

あいするはよき事なり。

つよいとは人間心できばよき事なれどもつは大食天之命の切るの神世界中の人のきを切るとゆう事切るよよいをつよいゆうなり。

まけたかつたごゆう

まけたとはよき種をまけたごゆう、こちらがまけたらかつたほうがよろこぶ人のよろこびはわがゆへなり、よきたねがまけたごゆうなり。かつたごゆうのは、かつたごゆうこと世界の人がおそろしがる、又我身もたかぶるゆへ上の所へ者はよらんひくい所ならずなをな水が流れよる、けれど高い所はあらしがふく岳のことで木も草もそだゝん此理でかつたごゆう。

やさしいごゆうのは

やは月の事八方の事四方くからあの人でなければ、あの人ならそ其人をさしてくる事をやさしいごゆうなり、又しほらしいごゆうはいつも心のかわらんひくい人をしほらしいごゆうしほは世界中のいちばん低い所にいるけれど世界中の人にあじをあたへるよろこばす

は「しほ」なりしほらしいごゆうは此理なり。

動物の三種

世界の嗅ある動物は食物嚙分ける物は上から目をふさぐなり、此物は胎内で形をつくり子を産むなり。

是れ天に住み天の養いて十用する證據なり、其種類は人間牛馬犬猫の類は又食物を丸飲にして腹の中でとかすものは目を下からふさぐなり此類は玉子で産おとし温みを以て子にへる是地の勢生を受けたる證據なり。

此類は蛇鳥かわすの類なり。

地の中でもいきを保ち又空を飛ぶの十用あるなり。

又食物を左右より喰ふ物あり。

是は生れたまゝ目ふさぐ事なし此類は玉子を産付け天地のようきで子にかへる又親なくし

て生ず是風の理なり。

天地水氣と温みとでわくなり。

わくごは、わは月日の事九は風月日のいきで出来るゆへわくごゆうもつめたい水が火の勢ひご合して湧ごゆうなり皆天地風の三種は動物計りでなく木竹草にも此理ある故大木になるも有伏ゐん木とて年限たちもちいさい木の類あり竹でものみふごるだけで又年限立てもちいさい竹も有るなり萬事此理を以て萬物を考へ見るべし。

雨 降 る 理

天一枚は、月の體國常立之命御姿はたきなり月は水の司さゆへ水をふいて地をしめすなり

月様御姿を龍ご云ふは

理王ご云ふ事なり、世界りよぶんそうりよ始めの子神の心にかのう事を、りようにかのう

ごゆう我が心に叶ふ事をりよけんごゆう金一圓ごゆうも、りよしん、ごゆうも、りよがんりよう手、りよう足、ごゆうも皆月日の事なり。

こいしごゆうは

こいごゆうは、こは月日の光「いは月の事心の事、人の心へ、我心うつすゆへこいしごゆう、こいは月日の誠の心をゆうなり、ほれるごゆうは、あさい事なり」「ほは八方の事心のよるごゆう事なりよるも月の事なり。

風 ふ く 理

風は月日のいき西北の風は男東南の風は女なり其譯は、神の古記を見て知べし風は八方より浪の如くに吹くは、かしこねの神ふきわけなり、りゆけい或は實のりをさすため男女の風をふき分けるなり、先づ「麥は東女風にて實のる」「米は西男風で實のるなり、此時

東風強ければ實入少なし萬事草木の實のりも此理に引合すべし。

開關ごいふ理

書物などに天地開闢ごゆふ事あり、かいびやくごは「かいは」海の事なり、びやくごは、日ご夜ごの九の理につんだ事をひやくごゆふなり。

つき日ごゆふ理

つきごはひろい事、ひごはちゝまる事なり、故にびんぼふを、ひんごゆふ、こつじきを、ひんにんごゆう。
面足之命様は、頭十二に三筋の尾に三つの劔ある大じやなり、一二の頭一ごきづゝ頭かはりて守護あるなり。
いなびかりごゆふて照るのは面足之命様の、頭の守護ある方に光るなり、又

いなびかりを、いなすまごもいふ是日様ご月様の御夫婦の理なり、ひかりごは日様か月様より理をかりたるを、光ごゆふ日様は、頭十二あつて十二時に一時づゝ頭かより、十二支の方へごりまき御守護被下故いなびかりの見へる方角は其時、日様の頭の向た方なり。

からてんじくごゆふ理

からてんじくごいへば、文子者なれば支那國と印度國の事と思へご是は大きな間違なり神は世界中がからてんじくやごおしやる。
からごいへば、みのなき物をからごゆうである、依てからごは何もなき何のたのしみもなき事をからごいふ、世界中がからの國や、てんじくごいへば此世界は、くで始まりくで納まる、九の理でせまる身の内も九の道具の借物なり、てんじくごは天ご地ごの九の理でせまつた所を、てんじくごゆふ世界中の事をゆうなり。

こきこゆう理

時の始りは朝の六つが始まりなり、六つとは、むつまじい理六たい始まりの理なり。

五つとは五倫五體の理なり。

四つとは、四方で面誠の理なり。

九つとは、此世は九のごう、九の世界の理なり。

八つとは、八方八柱の神の理なり。

七つとは、天神七代の理なり。

此時と時の間にはん時とゆふがあり、是を夜晝合せて廿四時となるなり。

四季の理。錢の理

一年に四季あり、年四季とゆふ、月に四季あり、月四季とゆう、日に四季あり、刻四季と

ゆふ、皆四季くにて身の内も世界もうつり變わるなり、夜晝十二時にて一時に四季あり是四十八四季なり、此四十八四季の間一四季に一度づゝ水もめくれれば血も通ふ合せて九十六度、通ふなり、せにごゆうは、丸くして、中に四角なるあなあり、丸きは世界を丸くつなぎやう合う理なり、金はつなぎなり。

四角の穴は四方の人のゆうすうをする、理なり、昔は、九六とゆふて九十六文を百とゆうなり、是は身の内よるひるに九十六ごの兩親のはたらきを理につめて九十六文を百とゆうなり。

百とはひやくとてひるとよるとの九の理のつんだ事を百とゆふなり。

一日にはじまり。 二 日たあぶり。

三日みにつく。 四 日(四つ)よのなか。

五日(五つ)りをふく。 六 日(六つ)六たい。

七日(七つ)なんにもゆふ事ない。

八 日はつぼう。 九 日(九つ)くがなくなる。
 十 日(十は)十ぶん。 十一日(十分)一にはじまる。
 十二日(十分)たあぶり。 十三日(十分)みにつく。
 十四日(十分)しあはせよきよう。
 十五日(十分)理をふく。 十六日(十分)六たい。
 十七日(十分)なんにもゆう事ない。
 十八日(十分)八方ひろまる。
 十九日(十分)九がなくなる。
 廿 日たあぶり。 廿一日たあぶり一
 廿二日たあぶりく。
 廿三日たあぶりみにつく。
 廿四日たあぶり仕合せよきよう。

廿五日たあぶり理をふく。 廿六日たあぶり六だい。
 廿七日たあぶりなんにゆふ事ない。
 廿八日たあぶり八ほふ。 廿九日たあぶりくがなくなる。
 三十日みにつく。
 一月三十日わるい事なくば一年も同じ事。

女の子を糸さんごゆふ理

女の子は糸さんごゆふのは、辰巳國狭土之命は身の内皮つなぎの神女の一の道具此やさし
 きつなぎの理をもつて糸さんごゆふ。
 此二つの理は夫婦の理なりこれ二つの道具は針と糸とのりなり針の行通りにやさしくつい
 て行けば如何なる者もつなぎつくなり糸はつなぎ道具皮つなぎの守護火水とは世界中の事
 をゆうてある世界つなぎには助けてなくばつなぎん此理を以て原助星とゆふげんは元なり

二〇六
助は文字から見ても日の力ごとく日の力は助なり萬事やさしく人をたすけたら世界の内の人がこいしがるこいしがるのはつなぐ理なり。

神様の御顯現

伊勢國五十鈴川の水上に鎮座まします日本總社内宮外宮様は諸冊様月日二神御入込被下たる也天照皇大神宮の天は水水は月様、照は火日様、す諾め冊おみ親様なり。八幡大神、春日大神御副被下は月讀尊、國狹土尊にして月日様の一の道具神様なり。讚岐國琴平山に鎮座まします金毘羅宮の御神體は大己貴命にして即ち大國主命なり。國狹土尊の變化にして金の神きんびら様なり、舟神と崇む舟は續ぎの理にて女一の道具と同一理なり、橋、權、櫓、皆男一の道具と同一理にして舟を自由自在にするなり、此金毘羅宮に癩病の者一心不亂に祈願を籠むれば御利益著しく在りたるは續ぎの御守護被下る神の變化故なり。

山城國男山に鎮座まします八幡大神の御神體は、神功皇后の御腹從り降誕まします譽田別皇子即ち應神天皇なり、此の八幡宮は武將神と崇む破軍星の御心則ち、月讀尊の變化ましますものなり、惡氣逆徒を制し被降る神様なり。

山城國伏見に鎮座まします稻荷神社と云ふは往古即ち神代之時天の親神始めて人間に米を與えられたる時、種配りを命せられたる神なり、心正直にして克く勤勞せられし故、米の神様と成玉ふ、人間其往古其時分神代之頃の如く正直真心狂はねば稻荷様と同等の位あれ共だんく人間の心惡氣盛んなる故に皆下りたるなり、例へば今の米屋が稻荷様と同じ理也、米買ふもの正直に遣れば御德意様と米屋主は敬えご代金を怠惰し又拂わざる時は皆嘲罵を請るなり、命の親たる米なれば其心得大切にすべきものなり、世間に往々狐の爲に誑かされ路に迷ひ困難する者あり、狐は賤しき獸類にして萬物の靈長たる人間必ずしも誑すものに非ず、然れども其誑さる者は人面獸心にして金錢出入交際を偽り或は命の親たる米屋を誑したる種の生ずる故に一の獸類たる狐の爲めに困難するは恥しき次第なり、能克

注意專一なり。

家々竈之上に祀る三寶大荒神は人間の命、世界水火風三つの寶、身體にては水氣熱濫呼吸の三なり、此の三つは平常一秒間も欠くべからざる物なれど洪水、大火事、暴風となる時は恐るべき大の荒神なり、故に三寶大荒神と崇むなり、かまごは六臺の事なり、六臺とは木、火、土、金、水、風の六つにて命を保つ故に九の土と云ふなり、くご九つ胸、六臺は三つ載る理。

出雲大社は大國主命、第三國狹土尊の御變化なり、縁結びの神又辨才天と祭るも同じ、金比羅宮も同じ、金の神と祭る金錢も續ぎ舟も續ぎ總べて乗り物は皆女の理なり、辨才天美女の姿を繪きたるは國狹土尊の御徳を現わす、怨み残念三代持越せば癩病と云ふは此神様の立腹、此神様は人間萬物續ぎ一切、又表ての神様ゆへ見える處美しき、奇麗なるは何事に限らず表ての續ぎは此神様の御心徳の現われ故、例へば人間も如何なる美人と云ふても癩病、皮膚病の如く皮續ぎ腐れ破れ或は體內の續ぎ切れて病體と成れば醜き姿

となるが如く此神様の心に叶ひ其の道に徳を積んだ心の理が美人と現われるなり、人の續ぐは人を立てる天の理を立てるも同じ理、又音聲の美は惶根尊の御心徳。

又月讀尊は昔より弓矢八幡大明神と祈りたる軍の神様にて勢いの神と云ふ、破軍星軍を破ると書く如く誠を立貫きて悪を破る勢いの強き立ちきつたる御心にて此神様の徳に依つて世界萬物は倒れず立つて居る萬物の物事成立つ納めの神、誠を以て世界を立てる事に強い善に突張り抜く挫けぬといふ神様なり、勢ひが弱くては何事も立ぬものなり、故に人間も天の理を守りて誠を立て人を立て、理を立て、行けば月讀尊の御心故、破軍星と云ふ、向ふて來るものが皆悉く負けてしもう突破らるゝなり、立てる事に強き神様なり、人間の埃と云ふは我身の思惑を立てんとして誠を失い天の理を立てぬ破る故我身が立ぬやうになるなり。

御教祖は天保九年秋戌の十月より神様の御命を承り給ひ立て、下された、用ひ下されとも同一（戌亥が建始まり）其の神様の思惑を立てるために我身我家我子を犠牲にしてあ

らゆる迫害の中幾度の監獄、如何なる御艱難も御厭ひなく其の突立つた御心を五十年間く
るわす御通り下され神の思召を立貫き下されて此の道が立始まり立教となつた、御教祖は
有形の物は人に施されたれど心は即ち神を立てられたのである、教祖には恩の送り様がな
いとの神様の御言葉もあり、故に御道は人間の親たる神の思惑を立てる道なれば人間の我
身勝手みかたての思惑おもわくを立てよと思へば間違ふ故神に水くさい、成立ぬ人間心で成立つ道でない、
人間心にんげんこころはすつきりいらんとの御言葉なり。

又此神様は道教の神と云ふ、地藏神とも云ふて道分け例へば此方は山、此方は海とい
ふ、斯う行けば間違ふ、斯う行けば道といふ教へが此神様が抜けてある人は出来ぬ。

此神様の御心は八方八神の括り故、此の理が立てば皆理が治まる、一日立つ一月立つ一
年立つと天理を讀玉ふ理、萬す納めの神様にて月讀尊と云ふ、人間も萬事成立せざれば
括りにならぬ如く、御道の教師に取れば天の理を心に納めて讀んで仕舞はば心が澄切る理
十分胸の内に治めて有れば如何なる人にも十分満足與へる事が出来る。

又五行の道では禮といふは此の神様より出て居る人を大切に、人は互に立て合ひ助
け合ふ禮儀といふ、此の理が無くては畜性に等し、人間も古き昔は野蠻時代で獸類の如く
力づくで倒し合ひ強い者が弱い者を倒し、喧嘩ばかり家宅の取合いと云ふ風な悪氣で有つ
たもので神がだんく戒め成人に應じて教を布き善道に導きて育て下さつて進んで来た
例へば獸類は親も子もない目上目下の順序も思を知る事も或は色情でも誰れ彼れの區別な
く義理も情けも禮儀作法もない、人の作物我の作物の區別もない只食ふ事ばかりの心、大
小便及穢せうべんおとよびきたない事も掃除する事も何も知らぬ如く人間も追々成人して神に近づくに従ひ人を
立てる事、行儀作法などが分つて来る。恰も子供が成人するに従ひて何かに分り来るが如
く、人間も神の世に進むに従つて心が進んで行くから我慾の汚ない心が清淨な立て合ひ助
け合ひの神の心に進んで居る、故に下等社會程此の理が心に無いのである、だんく心が
汚れると獸類に近くなる、それで段々此理の無いもの程下等に住い暮しが立ぬ難儀をする
神様もだんく子供こどもの成人待兼る、神の思惑之ばかりなり。又成人次第見へて来るぞや

と仰しやつて有る通り子供時代には大人の教育しても分らん如し、故に御道は皆深い尊い事が云ふて有るなれど我々の心が進んで行かねば聞いても分らん。神世は是れから先きに出來るのであるなり。神は何から何迄拵へが出来て居ると御言葉にある通り神の守護により世界が神の世に進んで居る。例へば昔は日本の内輪一國一郡でも取合をして居た如く又川向ふの火事と云ふて眺めて居た如く今は他縣の火事でも全國が知り全國から互助け合ふやうになつた如し。

又聖徳太子様は此神様の御變化なり建築大工業の守神と祭り來るは立木建物立柱と云ふ大工業は此神様の理、建てる役、正しい定規を以て立てる邪んだ傾いた物は立たん倒れる宇宙間一切の建築物は此神様の理に依りて建つて居る。倒れぬ也。彼の昔より城頭神頭に鯨を飾りたるは此神様の理を以て立つて倒れぬといふ理なり。甘露臺勤めに鼻高面と鯨鉦を此神様の處に飾るは此神の御神徳を象りたるもので鼻高と云ふ理が此神様が有る。鼻柱顔の辛鼻で顔が立つ鼻も立つといふ理は此神様の理なり。筋道を立てるといふ、誠を立て

る道を立て人を立て親を親上を上に立て女なれば夫に貞女操立の如し。成すべき事をきちん／＼と成す、人に恩を受けば恩を返す如き皆筋道を立てる理、鼻は人道とも云ふ、人の道を守りて崩さず立てる誠一筋といふが如く鼻は世界の花と云ふも同じ理、花も種々ある如し、人間の花も種々、花は實を結ぶもの、人間の鼻は考へる道具。其考へたる事を行ふ故一つ／＼實が入る理に成つてくる。

例へばあの人は鼻を高ふして居るといふが如く人間は成すべき事を成して踏むべき道をふみ、何處へ出ても恥かしからぬ道を通り立派に行ふて居れば鼻高ふしてびんとして居れると同じ、低い其反對で立て、居らぬ人にすべき事をせぬ、例へばこうすればよいにあゝすればよいけれど、思ふ事をせずに置くが如く、成さねば實は乗らぬ、其成さんのは埃から成さん其因縁で物が與らぬからようせぬ、故に人の中に出ても鼻低うして居らにやならんが如し、總て鼻の高低等は前世の理なり。

鼻筋の潰れたる者は前世に以上の理に依り我行ふべき理を立てずして大いに人の恩をか

ぶりて來たる理、鼻筋の立つは此神様男一の道具も同じ理、例へば一道具を使つて傳來の財産も潰し身を持崩し家が立ぬから鼻落ちるが如し、又一の道具が立たねば一家世界も立たぬ。鼻は舵取り鼻の落ちた者に考へのよいものはない、又鼻高天狗は大食天様の理で切れ物が上手なり、思切るから立つ總べて天狗など云ふ事は理想を繪いたもので昔話しなれど一に勢いと云ふて天狗は神故に人間の心の勢いに乗つて働くものなり、恐れて逃げるやうな弱い心の時には天狗は逃げて居る、是れは理を云ふたものなり。

天理の事を讀むから月讀尊天理の風を守るから大日如來天理の道を守るから不動明王

大日如來は惶根尊の御變化此神様一番大役故一世は。大日如來と變化し給ふ、世界中のものが物を云ふて居る。日々に大きいと云ふ意味、此神様休みなし、人體でも肺は生まれながら死ぬるまで夜晝一つも息は休まぬ如く、惶根尊は風の神、誠の神様故人を憎まぬ治める神なり、人に満足與ゐると云ふ御心にて堪忍の風といふて不足腹立を風に出さす寛

大にしてごんな者にも分る様説て聞かす如何なる事でも善き方くと物事の治まる様く人に足納與ゐるやう、誠から優しく言葉を吹かすのが惶根尊の智慧なり、それ故に如何なる事も皆善悪が分りて世が治まるなり、聞かすといふ助けると云ふは心を治めるも同じ此世は言葉の理で治まる世界なり陰陽和合によりて陽氣を生ず水氣と温みが合ふから風が出る如く天の理に合へば誠の風智慧が出る、御教祖が月日の御心に合致せられて神様の御言葉が出たるに依り世界助けの御道が始まる御教祖の神聖なる言行風儀は天理の風なり。又神憑の言葉一條が天の自由用と云ふなり。

人間も天の理に合はぬ天理に切れて居る心を以て働き居ては陽氣に勇む事が出來ず、智慧も出ぬ一身が治まらん、例へば人と人の心が合はず仲が悪ければ物云はぬ心、合はして睦じければ家内の中でも陽氣、又人と交際して智が付く如く例へば子供が學校へ行きて一年の間に非常に智慧が付いたといふ、是れは先生が教える事を一心に覺えて守つて居るからである、總べて心の合ふた先生につかねば智慧が付かんが如し、教わる師匠は我れに

取つては國常立尊、君臣の間は主君が國常立尊、親子にては親が國常立尊、夫婦の間は夫が國常立尊、皆水と火陰と陽が合ふて成立つ世界、故に親に切れ主人に切れ師に切れ兄弟親戚に切れ人に切れて居ては天の理に切れて居る。天の理に合はぬのであるから何程苦心しても頭が進んで行かん。

又此の神様は義の神様、義理と云ふも同じ、此神様から義と云ふ事は出て居る。總べて皆月日兩神から出るなれど月日二神から惶根尊に義と云ふ事は御任せになつて居る。人と交際、言葉一條、白紙に文字を書いたらもう直すと云ふ事が出来んと同じく云ふた事を違えん、云ふた事の違はぬといふ約定をたがえぬ如く人間は義が大切、義理の道萬事義と云ふ事は此神様未申、羊に我と書く、羊程義の堅いものはない、羊は虎に向ふ時は朋友を助けるために我れもくと皆先きにくと進んで行く、食われるといふ我身を虎に宛ててうて朋友を助けようとする性を持つ。昔の武士道でも義で持つて居た、例へば武士に二言なしと云て義を守り又向ふが刀を捨てれば自分も刀を捨て、掛る如し、義を立て、不義な

る事は死しても成さんといふ義を重んじた事、是れ義の徳也、羊でも惶根尊の理が附いて居るから其性が有る。神様が羊にも虎にも狗にも十二支に御變化下さつて開關の間潜つて通つて下さつた故に其理が動物にある、人間には勿論義が無くてはならぬ、義は誠我身の小さい慾を捨て、たとへ我身を犠牲にしても人を助けると云ふ、又國家の萬人の爲めに盡すといふ眞實誠なれば其心は神と同一、必ず神に分通する故天晴れの働きが出来、神は人間の心に乗つて働き玉ふ故誠に依つて神の働きが現れる。神言に我身捨て、もと云ふ心なれば神が働く。と仰ある通り、人間は我身を案じ身慾から心が小さく穢なく暗くなつて徳を落す眞の誠なれば天が守り玉ふ故、天運盡きず長久なり、誠が無くして此の世の役にも立たず又人に害をなし埃を積み、天の龍頭が切れて神退けば人間程脆いものはない。何處に居てもごおして居ても所謂疊の上からでも死なねばならぬ。天の龍頭さへ切れねばごんな危ぶない處でも大丈夫通れる。たとへ霞の如く飛來る彈丸の中を潜つても又昔で云へば矢の中でも身に當たる理がなくては當らぬ。例へば昔の太閤秀吉でも徳川家康でも

天が世の爲めに必要あつて守つて御座つた故殺されず天下を統一したと同じ。

昔より憶病者が世に勳功を残し、天下に天晴れの名を残した者はない。若し秀吉や家康が憶病者で戦場を恐れて出なかつたとすれば斯くの事業は出来ないが如く神は心に乘つて働き有るものなり。又國家の爲め世の爲めに犠牲となつて功勞を残して死したる魂は直ちに生れ出で、國家の上に立つ天徳を以て世に現れる故萬人の尊敬を受ける。上に立たるゝ人は皆前世に世の爲めに盡された因縁ある魂にて、是れが因縁心の道なり。

御教祖が照之亟を助ける爲に我身我子の命を神に捧げて助玉ふ教祖の眞實を神が見定めて、天保九年より教祖を神の社として天下り給ふ。教祖は二十五年の命を縮めて魂一つとなつて存命通り働くと仰られ、又一列の子供が成人したならば教祖は再び生れ出ると仰られたのであるが勿論一代を犠牲にして世界の爲めに働かれた御方々が再び世に出られぬ様な事では此世に神は無きも同然暗闇も同じ、此世は神の世界で一才先の分らぬ人間の自由になる世界ではない。人の神魂は神の分心故、代々此の世に出て居るものなり。身體は

所謂水の洵自然のものなるが、魂は神と共に不滅なり。人間の生死は全く神の支配にて決して人力の左右すべきものに非ずして神の自由在り。又我身の慾を去つて我身を犠牲にして人の爲め國の爲めに盡すといふ位な眞實があれば此神様入込給ふて實が利くなり、我身の慾で田地や山林や財産を持ち又金を溜めようとするやうな間は此神様の通力が利かぬ此言葉一で世の爲めをするとか息で働く天徳は出来ん、身薄になくは出来ん身薄にならねば此神の實が利かん、世の中に藝人とか歌或は浪花節とか鳴物を以て人を喜ばす事に達者なものも理は同じ、又天性美聲にして人に珍重敬慕を受ける人は此神様の理に叶ふたきれいな心にて前世に人の爲めになる言葉を使いてある理で或は人を喜ばせ人を助け其の道に徳を積んだ因縁有るなり、すべて陽氣に面白く話をして人を喜ばすとか勇むとか笑はす方面は此神様の理に叶ふ方であるが、之れの反對で我れの慾心から色々人を害する、人の心を煩わし人の腹立怨むやうな悪口をせしり話や悪風を吹かす方は皆我の徳を落して行くなり。聲のよいと云ふ理は中々意味が深い也。又鳴物は人間言葉の理と同じく鳴物の一番

は振鼓が第一位のものなり。是れは心の格好といふ理で、心の格好は悪しき處を立替せねば格好よくならぬ、又三味線は鳴物の中でも廣く用ひられ僅か三筋にて最も美妙なる音調を發し人心に陽氣を興へるものなるが、三味とは言葉の理にて三つの味いと云ふ理で強いと弱いと中程總べて言葉は心の現われにて人を助ける事も人を苦める事も大にしては世を治める事も世を亂す事も皆言葉が働いて居るもので大切のものなるが、例へば御道一條或は一家の子弟を教育するにも何時も柔かな言葉丈けでも育たぬ、助からぬ者あり、却て其者一生をあやまる事あり、強き嚴しき教育にて助かり、生涯の出世さす者もあり、皆云ふに云へぬこさうがある如く、兎に角埃無ききれいな即ち誠親心より施す言葉はたとへきびしき内にも温かき味いのあるのみならず、人心を感化し教訓するの力あるもの故、人の心育つなり。

不動明王は大戸邊尊の御變化不動は動せぬといふ理。

盤石の如くと云ふて人を助ける爲めには、誠のためには心を變ねぬといふ理なり、彼の

佛像に炎の中に眞黒の像が劔を持って泰然たる姿を繪きたるはたとへ如何なる中에서도心を動せず苦勞を厭わぬといふ、此神様の御心の姿を教へ玉ふ御道なれば如何なる惡因縁埃の中も切ぬきて埃にまびれぬ心を倒さぬ、人を助けるため世のためには眞心を變へん誠一筋押通すと云ふ眞實、定まつたのが不動の精神、又此神様と月讀尊二神で秋が出来て居る故御心も此二神同じ處がある、酉戌亥秋の神、力の神、働きの神、御守護も御副下さる。此神様は出世神とも云ふて人間は自慢や高慢では出世出来るものではない、低い心で萬事行届く心を開き自分が守り行ふて實力を拵へ價值さへあれば自然に神が引出しなされる、萬物引出しの神様、引出し下さるは何の爲めかといへば萬引與へて満足與へ下さる神故に人間も人に引與へる、満足與へるといふ、總べて我が働き骨折りにして人に十分與へると云ふ心になるから我身に力が備わる、又恩を返すと云ふ事に力を入れて人に引與へすれば自身に力が出来る(殊に御道は此理が大切なり)身の内では筋の御守護、筋は全身に行渡り働いて居る、たとへ一小部分でも聊か一分でも足らんごか短か、つたら筋を釣つて伸縮の自由叶

わぬ如くで隅から隅迄行届く一つの抜け目なく八方に心を配ばりよく行届く神様人間も其心の理で十分物事を心に納める、それ故に人に満足が與へられるなり。

筋は骨の行き渡る處は筋が行渡つて居るが如くで此神様の理は人のする丈の事はする人に引けん人のなす事、人の知る事は我れが成せん知れんといふ事はない、人に負けん後れぬ劣らぬ人より優るといふ心、例へば十あるものを六七分知りて私は是れでよい分つたと思ふて居る如きものゆへ高慢、私は行届かんまだ十分學びて上達せにやならんご自分の短所欠點と人の長所が見えて人を見下る心切る心なく、心使ひの低い柔かにして熱心の強い心から日々に徳が付いて上達する、又人が斯う云ふから人がどうしたからとて心がたよくして倒れるやうな眞實の定らぬ薄弱な心では何事も出来ん。たとへ人がどう云わうとも我れが是れをやりぬかねばおかんといふ變らんくるわん、眞實の据つた辛が立つから延び上る事が出来る。此心の無いやうな者は役に立ん。と云ふのは世の中は多く埃に染りて徳を落すので有るから自分の前生の悪性質を切り天の理を胸に納め心澄して誠一筋押

し切て世の中の爲人を助ける技倆實力の天徳を得るに意志の強固なる迷わん動せん強き誠を立抜く眞實親心が不動明王なり。

御教祖が雛形、教祖が如何なる中も世界の子供助けるために盤石の如き心にて御苦勞被下た故、此道が出来立つた、若し御教祖が御苦勞艱難に堪へられず中途御心倒し心を變へて居られたら、神の思惑たる此道どうなつて居るか云ふ、其の強き誠が末代まで光り輝くのである。又高慢は學ぶ事を學ばず自身行はずに理屈で人を押へるとか知らん事でも知り顔をする人よりねらそうに思ふても自身に行はぬ、通らぬたしかに心に分らん事はうそになる、又自分で分らん事や無い事云ふて人を迷はし人に迷惑を與へる。高慢では力は出来ぬ、高慢を去るから力が與わる、心に力の出来るは此神様月讀様の理、例へば理屈が達者になつて人を押へて見た處が其の實人を教育する仕込む、總べて實力がなくては役に立ぬ。又身内は此神様の入込んで端しく迄何處でも伸縮自由自在出来るは此位優しい素直な心はない、十人はくくに人を引出す押し出す人を連れると云ふ神様なり、自分の氣に合

ぬ者にも氣を合して行くのが引連れる心。又人間は心が低ふ無くては行届かず低い心で働かねば徳が取れぬ。どんな人の云ふ事でも聞分けるこいふ度量の廣い人を容るゝこいふ理で我が心廣く大海になる埃の中にも正味有り、よき所は心に治める又力は血、地からこいふ意味ありて低い處にある水は低い處へ流るゝもので此世の中に水程強い力あるものなし、水程やさしいすなほなものはない、例へば下駄をはいて居て力出すよりも足を地に落して踏張る方が力が出るやうなもので我身の低い程力が出る如し、草木でも根張りが下に下におりるほど上に延長して大木になる程多く花實が稔る如く、又親は根で有る（一切の親）根に切れては實が乗らん、肥がなければ太らん如く、道を治むるには我心落して師に仕へ、十分勉強して恩を返す、根に肥をする程自分に徳が出来る大人となる、例へば人に従ふごか頭を下げて人を立てる事がうるさいから頭を下げて物を學ぶごか習ふ事をせず、初めから物知り顔で先生顔がしたいやうなもので、たごへ如何なる賢人、聖人といふても天下に名を輝すやうな御方でも生れながらに物を知つては御座らぬ、幼少の時代には

或は學校で先生に習い、だんく目上や先輩に習ひ従ふて自分が先生になる、元々より先きに生れて又先きに學んで居るものが先生、昔からでも一世に名を擧げられた位の御方は皆師に従い苦勞せし修養の根が有つて世に現はれた如し。又世の中に物の能く出来る人、出世せる人は或は高慢も強く人を見下げるやうに見える人もあれど其實は心が届いて働きの多く強くしてある熱心が強いから徳を積んで高慢の埃無く理に叶ふから出世成功出来るなり。

又心の届かん物事の出来ぬ人に満足與えん人は天理にては高慢なり、例へば高慢の埃に前世から迫つて居る故に心には行届かそう満足與わよと思ふてもようせぬ、天から押へられて居る。蔓類は皆此の神様の理故ごんな事にも人より延び上がつて下向きに頭を垂れる。云ふのが此神様の御心の理が現われる。彼の藤は美しい花を咲かして高い處から下に俯向いて花を見せる、人間も如何程出世しても心を低くめて人に花を見せる心の味、此理が大戸邊尊の御心に叶ふ處を人間に見せて居つて下さる、さがりやさがるほど人の見上げる

白藤の花、咲いて實のない山吹の花、蔓類は何んでも他の物に蔓が優しく副ふて伸びる、其のものよりどうしても一段伸び出るといふ性、低い柔か、やさしうて實力の勢が強いもの。又人間に對する高慢は人の云ふ事成す事つきくす或は我身を顧る智慧無く人を恨み人が行届かぬやうに思ひ又人を見下げ我がわらいやうに思ふて我事を鼻にかける、人に折れそれのない高い心高慢から人の云ふ事でも耳に入らん。用いんに情けのない小さい心から胸の内が暗くなる。

神様に對するの高慢は己が前世より今世のよごした埃が十分有りながらそれを拂ふて心を磨く事、心に主とせず又氣付かずして清淨なるやうに思ふて自分の目的や思惑を立て様とする心で道を通る心、我れの勝手思惑あれば天の理を正直に守る、即ち神に素直になる事が出来ん故高慢が有つては話が納まらん、教へ通り行えん、例へば日夜の身上の大便を思ひ神様の御守護で働かして貰へた、さして頂けると云ふ心でなくして之れが我れが力で成したものだ、我れが助けたものだ、我れが働いて我れが食ふて居ると思ふ、心は神に對

する高慢神の理を突崩す理。故に形は人に與へても心は與へる、盡す心なき理である。道に年限重ねて人を助ける位置に在る人には神様に對する理の論しがある。人を出世させようと思ふ誠の心が我身の出世出来る心である。慾と高慢大嫌い御教祖は始終仰せられたり。

瓜と茄子の歌

人間一名一人の心を改め誠となりて互に心を合して成したる事は成り何事も成就す、又心を合さずして成したる事は成就せず、たとへ成りても後破れ易くして成したる事仇となる事多し、故に萬事成就は眞より成るなり、是れ眞實といつて誠の實なり根元の證據なり茄子と瓜、なすとは事成就する理にて事を成す、眞實の成ると云ふ事、又うりは愁と云ひて花多く咲いても實成る事少く、仇花多し故に昔より、たかいやまから谷底みれば、うりやなすびのはなざかり、これわいごんぐどあれわいごんぐど、此の歌の意味は月日

様が永年の間人間のする事成す事を高い所より御眺め被下た、其眺め被下た中に人間思い
 くにて心に巧み身に行ふ業にて實を求めよ財を殖そうとして眞實の花を咲す者もあれば
 又愁いを招く花咲かし嘘偽りにて財を殖を實を得よと思て種々行ふ者の盛りと云ふ歌なり
 茄子は莖(空気の理)が紫葉も紫花も紫成る實も紫なり。紫は色の王にて青と赤との合
 いたる色なり。青赤は月日の眞なり、故に千に一つもあだ花なく始めより終り迄實が成り
 て誠の理なり、瓜は葉青く蔓青く成る實も青くなれども肝腎の咲花が黄なり。故に瓜はあ
 だ花多く成る實は十に五つ三つに一つ位のものなり。人間行ふ業も心を合さずしたる事は
 十度の事を行ひても都合よくして五度位なり跡五度愁を招きて悲みの種となるなり。故に
 よくよく心を改め我れより人に心を合し睦間敷して事を行ひ其の花を咲し誠の實を成らす
 べし、謀反の心にて咲したる花はいかに榮ゆる共長く保たず折角子孫に譲りても、却て仇
 となるなり、たとへ我身一代榮華に暮すとも子孫の難儀に及ぶ事鏡に懸て見る如く明かな
 り。又一つの意味は此度は谷底にてはだんくく多く用木が見えて有るぞやと仰られ谷底

に用木が有ると云ふ事。歌は神が時世を知らず此の近年に至りて鮎擲いが流行する此理は
 愈々神様旬刻限が至りて神因縁の深き魂を擲い集めらるゝ理である(前生の因縁寄せて
 中護する)但し此意味は最も重要な事なれば文書に書現す事出来ん。

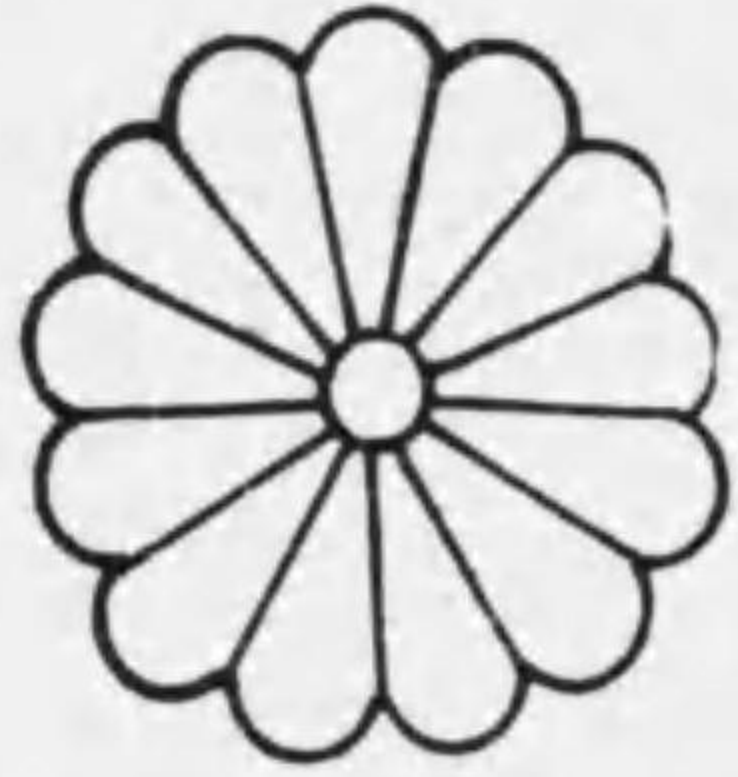
松竹梅の理

松は秋にて月讀尊、竹は春にて國狹土尊、松は人間身體骨足の理、色は柑を云(辛)故
 に松の皮はまにあわす松茸は秋生じ人間食物に與へ被下男一の道具の理、竹は人間身體皮
 及一の道具の理色は(外側が云)緑又は青竹なり筍は春生じ人間食物に與へ被下女一
 の道具の理故に竹は皮のみ用ひ辛のなきものなり、松の辛竹の皮と云男女一の道具の理な
 り。梅は松竹共に合したる理なり。芽の出ぬ先花開く人間夫婦夜交合の理、花は色なり香
 は情なり、實は子の宿りたる理熟して酢きは秋の理、人間宿り始め冬夜の理十月となれば
 秋宵の理なり、梅干として永く保つ處は眞實は永き理なり、松竹梅男女交合子の宿ると同

一の理なり、植わて樂み繪に畫きて眺め又歌に詠むなり。

菊 桐 の 理

紋表菊



紋裏桐



我が大日本帝國 天皇陛下 皇后陛下の御紋菊は艸花の王なり、人間身内に取ては耳にて聞く、鼻にて考ふ理下より事情を聞き御政事被下理紋と云ふも花と云も同じ理、きくと云ふは人間にては耳にて聞くと云名なり、花といふは人間鼻の理にて形の名なり、芽の目と同じ葉は齒と同じ則ち口也、四役何れも四の理にて四四十六菊は天皇陛下の御紋也、桐は五七の桐 皇后陛下の御紋なり、兩方五つは身の内に取りては五倫五體の理、真中七つは思切り見分開分の誠の神内を治め續ぎ下さる理。

正月祝の譯並に門松を立る理

正月とは此の世の人間の月様が正しき御心にて始め被下たる故に年の始を正月と云ひて今に祝ふなり。元日とは日様なり松を立てるは雄松雌松を左右に建て七五三を張りて年徳大善神と祭り禮拜するは年徳とは十二月月三百六十日は皆月日の守護にて一年の内に五穀野菜綿糸一切御與へ被下れ又立木魚鳥迄人間の爲に御守護被下故に此恩徳を受け年々立つなり。松と云ふは三代目辛の立つを待つといふ理にて三年目に芽出で辛のたつまでは古葉落る事なし。木芽は一年に人間一代と同じ理なり。門松三つの辛なるを理とす我身夫婦一代子の夫婦で二代孫の夫婦にて三代なり、孫を産む者を我身よりはよめと云ふは是三代の世の芽を出す理にてよめといふ孫の代となりていふ時は二代を父母と云ひ三代をぢやばと云ふ我身より前後を父母祖父子孫と云て五代のものなり。七五三はじめなり。其七は天神七代五は五倫五體三は産み廣め産の理、奈良長谷七里を七日にて一廻り人間最初五分よ

り生じて五尺となる産で三度産み被下れし理にて着物七襦袢五帶三身の内に纏いて居るは是神の八形の證據也、鏡餅一と重の理は月日二方の御身輝く理にて鏡と云ふ天地也、故に夫婦心圓く柔にして仲善く揃ふて暮す心を供るなり、みきと云ふは正しき眞直なる氣を供ふるなり。故に木の直なるを幹と云ひ横に出るを枝といふなり。木實を供ふるは最初人間食物の始めは木實なり、正月七日五日八日より十二日までは三日十三日より十五日まで十五日の間をしめの内と云は月様十五日となれば満月と成り給い人間もまる十五歳となれば一人前なり。數子の元牂冊様が九億九萬九千九百九十九人の子數を腹に持ち被下たる理鍊といふ妊娠の理にてにしんと云七日十五日に粥を食するは人間元泥海より昇りたる理にてかゆとはかいにて海なり、正月元日より十五日迄の祝いと云ふは元本始りの理を忘れぬ爲人間に親神様が教え被下て今に形を行ふものなり。

嶋 臺 の 譯

大倭國にて國式祝いと云て婚禮酒宴の座にて第一の祝ひとする嶋臺の理夫れ人間は夫婦結婚の始めとす故に祝ふ可なり大事なる祝といふなり、我々住居家とする國は島なり、臺なり水の中なる浮島なり睦くなる臺なり、敷島なり松竹梅鶴龜老人夫婦の尉姥熊手帚男熊手女は帚を持って掃除をする形を顯したるは此の世は掃除をする程清き芽出度事はなし人間身體胸の内を掃くははくとは白にて白く清らか奇麗にするなり。胸の内の悪しき埃を祓いたるを六根清淨潔白と云ふなり、六根とは六つの根則胸にて六つとは目にて見一鼻で考へる貳口にて言葉仕ふ參耳にて聞くが四香い或は嗅氣をかぐが五吞食にて六なり此六つの本を司る根を胸と云ふなり根は水なり心なり男の心にて積む埃は大きく女の心にて積む埃は細かなり、男の埃は第一欲い腹立憎い高慢四つありて男神戒め給ふ、女の埃り第一惜み恨み我身可愛慾此四つ女神戒め給ふ、右互に男はあらかき埃り女はこまかき埃を拂ひて



胸の中を掃除すべし。故に男熊手女箒なり、此の如く胸の中悪しき埃を祓ふたらお前百まで私し九十九迄共に白髪と成までもと云様に長生して子の代孫の代を安心して樂しむ理なり。鶴は立つると云ひて男一の道具の理なり、龜は續ぎの理にて女一の道具の理なり。鶴は千年龜は萬年と古より唱へて壽を祝するものなり。松は三代芽の眞の立つを待と云理にて人間なれば孫の夫婦揃ふ迄ちば、揃ふて長生して其三代芽の辛の立ちしを見て足納し歡喜んで往生するを待つといふ芽出度と云ふは三代目夫婦揃ひしを尉姥見て喜びたるを言ふなり。松は三代芽の出ぬ先は古葉落ちぬものにて誠に目出度ものなり。竹は一年にて親と同一となる故に親子だけだけと云ひて中節揃ひしものなり、ちうは中にしてせつは節なり、ふしなりふしより芽出で枝生ず、一年も十一月中十二月節より則ち冬至小寒の中節、春は二月の中三月節にて始り夏は五月中六月節夏至小暑の中節秋は八月中九月節にて始り如斯四季中節にて成長するなり。二代芽子と雖も孫の代となれば丈け丈けの理なり梅はふみる理なり。殖るは陰陽和合夫婦交合にて子の宿り月止ると云いて泊ると云も宿る

といふも同じ事なり。月様は陰なり男なり宿りし腹は日様也陽なり女なり。梅は芽出ぬ先きに花咲きて匂ひ薫しく花は色匂いは情夫婦交合なり。色情とはいろかどゆいて花の薫りと云も同一にて花香いろか梅の花は寒に咲を常とす寒は一日にて夜丑の刻芽の出ぬ先、人間朝となれば目を醒して見る事が一番先きなり。なれ共夫婦交合の時は見る事無くても行ふもの花咲き情寫る梅の實結びたるは人間子の宿りたる理なり。故に梅は殖る理にて目出度祝ふものなり。人間夫婦有りて子孫兄弟伯父伯母甥姪從兄弟と段々殖えて繁昌し村を成し郡となし國と成り世界出来たるなり。水の中なる島なり大倭は日の本島國にて往古はあのころしまと云ひ秋津洲とも言ひ現今にて大日本といふ大和國が國の始まり故日本を大倭と言ふ。

身體と世界五倫五台十千十二支の本元 (論の臺)

五倫とは五柱の尊の御心なり。五體とは五柱の臺なり體なり、代なり臺と云も體と云ふ

も代と云も同じ事也。五柱の尊の御心とは、月様日様、金星、水星、木星なり金星とは第一三派助星、木星とは第四破軍星、水星とは第五朝明星なり、五柱の尊の臺とは第一國常立尊第二面足尊第三國狹土尊第四月讀尊第五雲讀尊なり、木火土金水是五行也、裏表となりて十幹となる。裏倫表體十幹とは甲乙丙丁戊己庚辛尊、壬癸木乙火丁土巳金辛水癸なり。五倫はるなり五臺はとなり干支となり、るは甲乙丙丁戊庚壬のるなり。とは乙丁巳辛癸の五つなり。戊己、子國常立尊、丙丁午面足尊、庚辛、辰巳國狹土尊、甲乙、戌亥月讀尊、壬、癸卯雲讀尊、右五柱は幹也。

男身體五倫五體の理

髮 甲 陰莖 乙 木にて 甲乙

面 頭 髭 口

丙 戊 庚 壬

腎 胛 睪 腹

丁 己 辛 癸

火 土 金 水

丙 戊 庚 壬

女身體五倫五台の理

髮 面 頭 鬢 口

甲 丙 戊 庚 壬

足 腎 胛 陰門 腹

乙 丁 己 辛 癸

木 火 土 金 水

甲 丙 戊 庚 壬

男女交合の五倫五體本元の理

男は五倫女は五臺にて則ち女は五つの臺なり、女臺となりて此世の人間始たるなり、是陰陽和合の始めなり、男女交合の時男の胛腎は天なり女の胛腎は地なり。男の腹は雲なり女の腹は海なり、男女陰莖陰門は空氣なり交合の氣淫の催すは男の腹に在る腎なり、是世界にて雲に含みし水なり、壬なり陰莖より陰門に遷る、是甲より辛に遷り女の腹なる子宮に宿るなり、宿ると言は月泊るなり、是人間子種の始りなり十月の間冬夜生るは春朝成長して世渡するは夏晝死する時は秋宵なり。

木 男 陰莖

甲

女 兩足

乙

火 男 腎

丙

女 腎

丁

土 男 胛

戊

女 胛

己

と同一にてよき女といふ事なり。龍宮なり子宮なり、子は最初一滴の水なり、水は國常立尊、元本は大龍王の理、故に子宮は龍宮なり、子の宿ると云も月泊るといふも同一の理、龍宮乙姫と云ふは女の體を云ふ世界何よふも天より種を雲にて含し大海へ下げ被下也。右身の内に有る事は世界に有り、元々人間御造化下さるに付身體と世界の理と同一に御造り下さる、人間一人を一年と積りて九億九萬九千九百九十九人の魂を冊様の御腹より産み出し下さる故身の内に有事は皆世界に有る也。

◎十二支の譯

十二支の動物は人間に成るすぐ前のものである。一番人間に近づいたものなり。人間が最初は五分に生れ長き年限の間に、八千八度び生れ替つたと仰しやつて色々のものに變化して潜つたのみならず、神様も開闢の間皆潜つて通つて下さつた。それで子丑寅卯と云ふやうな十二支の名があるなり、人間でなく神様が此の十二支に御變化下されしもの故に、

其の理が獸類に有る、人間も此の年に生れた者は因縁として此の性質がある、併し是は大體の事で大あらめの事なり、其人々にて性質は異なるものなれども、十二支の神に對する因縁の性質、此の理は必ず多少有る、又神様は人間をこゝまでに育て上げる爲めには實に容易ならん永々の間の御苦勞を下されたものなり。

例へば人間が狗位な時代には馬とか虎とか獅子とか云ふやうなものに、御變化して下されて在つた、それで恐れて治まつたので全く成人して人間と仕上げた上は神様は元の神と成給ふ、神と云ふものは、人間の姿にでも龍にでも大蛇にでも何にでもなる、人間の智慧では到底思ひ計る事の出来ない御力、所謂通力の有るものが即ち神である。

辰巳と云ふて國狹土尊も龍に御變化下つた故に金錢には龍が書いてある、此世に昔より大きな恐ろしいものは皆月日が色々の物に變化して居らるゝなり、或は惡氣を戒め、善這に導き下された天地開闢の時は八十夫婦揃ふた、之れは八方八社の理、此の時に開闢の時の親様は國狹土様、月日様の御召により之れは女猿と變化して出たと仰せ下さる猿王權現

と祭つてゐるは此神。産の王と云ふ神様なり。

九億九萬年は泥海中の御苦勞下さつた間九千九百九十九年は、開闢下されての後の年限故、一世天保九年から二世となる、但し九億九萬と云ふは分らん事を云ひ下さつた事神様には御作り下されたものゆへ、年數は分つてゐるけれど人間には泥海の何んにも分らん間を九おくと云ふてある、佛教で西方十萬億土といふやうなもので人間でも分らん事。

最初五分の人間が四寸に成長してより八千八たびと云ふて鳥やけものをくゝる最初は魚の形、魚でも鱗や鰭のないものから鱗の有る泳ぐ魚となり、魚から鳥となる、鳥でもだんく發達して鷺や鶴のやうになつてから獸物となる、獸類もだんく生れかわり死かわり發達して、馬とか牛狗とか云様なものになつて人間と成つたもの也(最初魚から鳥に變化する第一歩は鷺、あひるは前世を魚故に前世をよう忘れん、水をよう離れぬ如くで人間も何程結構な話聞ても好きな道で怪我をする如きもので、それが即ち前世因縁故、是れを立替えるのが御道一條人助ける善の方へ心を向け力を入れるに従つて心の成長發達變化して

悪が取れる)皆な一世の間神様が變化さして育て上げて下さつた總べて水や火にかければ何物も色々變つて來る如し、依てだんく今日の狀態に迄人間も世界も進歩して來たものと仰下さるものなり。

又人間が八寸に成人した時泥海中が水と土とが分りかけ一尺八寸の時、海山天地日月分りかけ三尺にて物を云ひかけ、五尺に成人した時、海山天地世界も皆な出來たと仰下さる、だんく成人に應じてじき物、りうけいも、不自由なきやうに與へ下されて、水中をばなれて陸地にあがりて住むやうになり萬事の事を人間に入込んで教へ仕込下された。

人間も初は裸體で又穴に住ひ一穴に何人と住ふて段々子を産み繁殖す、それで今に穴のぞきと云事を云一廻りと云ふを七日間とするは、元奈良長谷七里四方の間に七日間に産下ろしの理、今に生れた時は一と七夜やは月様殖える方死んだ時は一と七日かは日様へる方三十日にて山城、伊賀、河内、産下し三十日を一と月と云大和國內に産下しの人間が日本の人間故大和魂といふ、日本魂。天理から人間と現わして此世に産み出して世界萬物御作

り下されたる親様の御苦勢は容易でない、ようこそこゝ迄ついできた、實の助けはこれからや、と仰らる魂が落ちんやうに色々神が入込んで神となり、佛と成り、宗教宗派種々ご教の道を拵へて一世の間、育て下された故、元々より神の思惑たる陽氣すくめの眞の神世に出来る人間と、成人して今その時季旬刻限が至つたのであるから最早是迄一世の間のやうにあちこちと魂の變化は絶體にない事になる、例ば人間も一人前になつたら片付く今造の年限は子供の成人の時代なり、これから先きが神の代となる。そこで此度は二世界の立替の時故、此度魂が落ちたらもう上がる事が出来ぬと仰下さるのである。

前生の因縁よせてしゆごする、これは末代しかと治まるご御筆先に有る、是れは皆、人間の魂を分けて心通り神が役割を定め下さる事なり。

御授の掟

左あ左段々の席復し復しの席をして左あ一日の日といふは生涯の心、一つの理を以て一

つの席とす、席に順序一つの理は克く開分け席に順上一つの理は生涯の理を論しよ、生涯の理を論するには克く開分け六ヶ敷事は一つも云はん、ごをせいこをせい是れは云はんこれ言はん、言はん言はんの理を開分けるなら何角の理も透明といふ、夫れ人間といふ身の内といふ皆神の貸し者借物心一つが我れの理、心の理といふは日々といふ、常といふ、日々常々といふ事情ごをいふ理幾重事情ごんな理でも日々に皆受取る、受取る中に皆一つ自由といふ一つの理自由といふ一つの理はごに在るとは思ふなよ皆銘々精神一つの理に在る、日々といふ常といふ日々常に誠一つといふ、誠の心と言えは一寸には弱い様に皆思ふなれご眞より堅き永き者は無い、誠一つは天の理天の理なれば直ぐと受取る、直ぐ返すが一ごつの理、克く聞き取れ又一つ一人一銘の心に眞と一ごつの理があれば内々充分睦間敷といふ一つの理が修る、夫れ世界成程の者成る程の人といふは常に眞一つの理で自由と云ふ克く聞取れ、又一つ是れ迄運ぶと云ふ盡すといふ運ぶ盡す中に互に助合といふは訓する理、人を助ける心は眞の誠一つの理で助ける理が助かる、克く聞取れ又一つ是迄

運ぶ盡す一つの理は内々事情の理、銘々事情の理に修め是より先永くかわらん事情に。

二四八

眞の寶 上卷(終)

大正十四年十一月十日第一版
昭和二年一月二十日第二版
昭和三年四月二十日第三版

編輯者 奈良縣丹波市町三島 安江



發行者 天祐社
代表者 安江

印刷人 淺野好三郎
神戸市布引町二丁目二十三番屋敷

印刷所 白馬堂印刷所
神戸市布引町二丁目二十三番屋敷

317
683

終

